22 繰り返す有熱性の複雑性尿路感染症に対し漢方を用いた経験

東京品川病院 泌尿器科[1)]、東京小児療育病院 泌尿器科[2)]
青木　九里[1)2)]、田中　裕貴[1)]

【はじめに】基礎疾患を有する複雑性尿路感染症（complicated urinary tract infection :c-UTI）は難治性で重症化することがある。繰り返す有熱性のc-UTI症例（脳性麻痺３症例、未治療重症糖尿病・担癌患者1症例）に補中益気湯を処方し、再発が抑えられたので報告する。

【症例】症例１：27歳、脳性麻痺、重度知的障害の男性。心因性の尿閉あり。8か月間で急性細菌性前立腺炎を3回繰り返し、東京小児療育病院泌尿器科に依頼された。抗生剤加療後に補中益気湯を処方した。2年経過するが再発は認めない。

症例２：49歳、脳性麻痺、重度知的障害の男性。3か月間で急性細菌性前立腺炎を3回繰り返し、同病院泌尿器科介入。抗生剤加療後補中益気湯開始。尿所見改善していたが、約1年後、尿中白血球20-29/HPF、細菌尿認めるも重篤化せずに経過観察となっている。

症例３：44歳、脳性麻痺、重度知的障害、神経因性膀胱、尿閉にて導尿管理となっている男性。急性腎盂腎炎を2か月間に2回繰り返し同病院泌尿器科依頼。抗生剤加療中より補中益気湯投与。1年後尿中白血球多数、細菌尿認めたが重篤化せず、2年経過している。

症例4：75歳、未治療重症糖尿病の男性。特記すべき既往歴なし。尿閉にて他施設でバルーンカテーテル留置後、熱発、血尿、膿尿出現。脱力感のため東京品川病院受診し、CTで横行結腸癌、多発性肝転移、前立腺膿瘍がみつかった。結腸癌の治療を優先するため泌尿器科的には抗生剤による保存的加療を行い前立腺膿瘍は消失した。しかし、その2週間後左精巣上体炎となり加療、精巣上体炎改善後に外科にて抗癌剤治療開始となった。約3か月後に左急性巣状細菌性腎炎となり3週間抗生剤加療した。抗癌治療も再開された約6か月後、左腎膿瘍となった。腎膿瘍はドレナージを行い、抗生剤加療を2か月行った。また、抗生剤加療中から補中益気湯を開始した。補中益気湯開始後2年経過するがｃ-UTIは認めていない。また、患者の希望で抗癌剤治療を途中中断したが、転移巣は縮小し、不明瞭となった。

【考察および結語】

補中益気湯の出典は「内傷弁惑論」で、金時代の李東垣の創案した方剤である。本漢方は虚弱者の諸病や慢性疾患患者で体力低下し、消化機能の衰えた者の治療に用いられる。大野らによると本漢方は、in vitroおよびin vivoにおいて、NK細胞を活性すると報告している。免疫機能低下状態の患者における有熱性のｃ-UTIに対し、補中益気湯の併用も選択肢の一つと考えられる。